



談 話 室

若手研究者に想う — 小さくとも世界 No. 1 の
“Small Giant Company” を目指してきた立場から

私は、東北で仙台に次ぐ小都市；郡山市にしながら、会社創立時点から分析の一分野で世界 No. 1 を目標にして、今から18年前に創業した。ここではその経験を振り返りながら、表題のタイトルで一文を寄せ、志を持てば；片田舎にいても世界 No. 1 が達成できるということを知っていただき、若手研究者にチャレンジ精神の奮起を促したい。

会社創立当時の1991年前後は、日本のバブル崩壊の兆しが明らかに見え、テレビ・新聞・雑誌などでは不景気が報道され、すでに日本経済は下降線を辿っていた。そうした最悪の時期に、わずか2名で創業に踏み切ったが、当初から志が高すぎると、いずれの親戚・友人・知人からも言われ、他人から見れば正に無謀と言うほかなかったと思うが、私はそうでなければ創業する価値がないと信じていた。そのビジネスとする製品は、ある大学教授が10数年をかけた基礎研究の成果であるGCの心臓部を担う“世界初の金属製キャピラリー分離カラム”であり、もう一つはすでに多くの基礎研究報告があるにもかかわらず、当時はまだ一般に広く利用されていなかった、縦型の熱分解装置であった。これらは現在も会社の両輪として活躍している。

私は最初から分離カラムを基礎研究からするつもりで創業したわけではないが、自分もその研究開発に20年以上にわたり従事した経験があるので、仮になんらかの問題があってもなんとか乗り切れるであろうと、当時は無謀にも高をくくっていた。しかし実際には、創業当初の数か月の段階から、キャピラリー分離カラムの製造歩留まりが10%以下という、大きな暗礁に早くも乗り上げてしまった。正に1年未満で倒産の危機に直面したわけである。そのために当然資金は底を着き始め、自分の甘さに同僚とその家族をも巻き込んだ状況を悔やんでみたがどうにもならない状況であった。しかし、友人の弁護士と株主の援助のお陰でこの事態をなんとか乗り切ることができた。一般に、前人未踏のものには恐ろしい魔物が潜んでいると言われていたが、その当時は私や知人達が、それまでの“勘と経験”を総動員してもいかんともできなかった。今にして振り

返れば、東北大学の元大見名誉教授が言われる“国際競争力のある独創的な技術開発には、学問に基づく本物の産業技術が重要であり、そのためには己の勘と経験の世界に加えて、確固たる学問に立脚した洞察力と実行力が大切である”という見地からの解決法が必要であった。そういうことで、創業当初からこの世界初の製品を開発し、しかも安定した生産と販売を継続することによって、お客様からその対価を頂くことは生半可でないことを思い知らされた。また、学術的な研究成果、それに基づいた試作化と商品化とは、全く異次元のものであることを肌で学んだのである。さらに、一度でも奇跡的に製造できた経験を励みとし、諦めないで“できるんだ、するんだ”という執念を持続することが、いかに重要であるかを体得した。考えに考え抜いてこそ成功に辿り着けるもので、成功と失敗は表裏一体であるとはよく言ったもので、ちょっとした事実を見逃したりせずに、加えてファールのようにじっくりと現象を観察することで、意外とその薄皮一枚をすりと潜り抜けることもできることを知った。

ここで話は変わるが、東北大学加齢医学研究所の川島教授が言われているように、脳の機能は一般的に20歳頃を境に減衰の一途を辿るが、65歳頃を頂点として50～80歳の範囲では、知識を問う試験成績においては30代よりも優れているという。つまり140億個もあると言われている脳の引き出しの中味には、知識に加えて勘と経験に基づき、それらが相互に関連した状態で理路整然として詰まっており、その総合判断力は65歳頃で極大値をとるそうである。現在のコンピュータがいかに優れているように、あるいは元気な若人がいくら東になったとしても、年月を経て集約した英知には適わないことも多々あり、一般的にその道の専門家の知識と洞察力にはかなわない。しかしながら、多くの場合彼らも自分の経験というタガにはまった考え方から、脱却できない場合もあることも事実である。これは別の言葉では、融通が利かないともいえるが、されど、若人はこの集約した総合判断力の頭脳をうまく活用しない手はないし、また有効に生かされれば専門家としても嬉しいのではなかないかと思う。

現在は、インターネットが世界の境界を事実上なくし、世界のどこに居ても瞬時に多くの望む情報を得ることができる時代であることは、衆知の事実である。インターネットを用いたSkypeは電話革命に値するが、世界中のあらゆる所へ何時間話しても無料の時代が実現しており、これを使用すればかなりの経費節減にもなる。無料といっても、そこで求められることは、コミュニケーションに必要な語学手段となるが、それにも増して重要なことは母国語で理路整然と考え、議論できる基礎力をつけることであろうと思う。

それと平行してこれからの若人は、この狭い日本で、東京などの大都会でなければビジネスができないなどという時代は確実に去ったことを再認識すべきであろう。私は創業当時から都会でビジネスを開業する必要性を感じず、当社製品カタログ表紙には世界地図を描いて、その一つに東京と郡山の位置は、ほとんど同じであることを主張してきた。確かに新卒の採用となると、地方であるという理由で敬遠され、優秀といわれる若人の採用が極めて困難であることは事実であった。しかし、外国人の採用においては、東京駅から1時間30分弱というアクセ

スの良さと果物の美味しいこの地区はプラスの要因であった。
若人にとっては、新たな環境で自分がどう成長し、何に生甲斐をかけてチャレンジできるかが重要である。この点から、両親から頂いた限りない可能性と潜在能力に磨きをかけ、そしてそれらを生かすチャレンジ精神を養うことが、むしろ大切ではないかと思う。

〔フロンティア・ラボ株式会社 渡辺忠一〕

南極だより ⑧ (別掲, p. 94)

インフォメーション

中国四国支部創立 50 周年記念会

2008年11月14日(金)、午後1時30分から広島大学霞キャンパス(広島市南区霞町1-2-3)内にあるレンガ造りの広仁会館2階の大会議室において、中国四国支部創立50周年記念会が開催された。

まず司会である中野恵文副支部長のご発声で記念式典が始まった。本仲純子支部長の式辞に続いて、日本分析化学会会長である渡會 仁先生(阪大院理)からご挨拶があった。引き続き、これまで支部の役員を選任して支部運営にご貢献いただいている企業および当支部の主要事業である分析化学講習会にご支援、ご協力いただいた企業へ支部長から各々感謝状の贈呈を行った。また祝電も披露された。なお、感謝状を贈呈した企業は次のとおりである(順不同)。支部役員協力企業(29社): 大鵬薬品工業(株)製薬技術センター、住友化学(株)基礎化学品研究所、(株)クラレくらしき研究所、JFEテクノリサーチ(株)倉敷事

業所、(株)ジャパンエナジー水島製油所、(株)三菱化学科学技術研究センター、パブ日立工業(株)、中国電力(株)エネルギー総合研究所、JFEテクノリサーチ(株)福山事業所、MHIソリューションテクノロジー(株)、三菱レイヨン(株)中央技術研究所、出光興産(株)徳山製油所、(株)東ソー分析センター、(株)トクヤマRC研究所、(株)三井化学分析センター、(株)ユービーイー科学分析センター、住友金属鉱山(株)新居浜評価技術センター、ダイセル化学工業(株)大竹工場、三井金属鉱業(株)竹原製煉所、(株)日立ハイテクノロジー、(株)ジェイ・サイエンス中国、(株)島津製作所、セントラル硝子(株)化学研究所、武田薬品工業(株)光工場、帝人(株)先端技術開発センター、協和発酵工業(株)生産技術研究所、帝人ファイバー(株)、東レ(株)複合材料研究所、日亜化学工業(株)。分析化学講習会協力企業(23社): 大塚電子(株)、エムエス機器(株)、(株)小川商会、ジーエルサイエンス(株)、(株)資生堂、(株)島津製作所、新川電機(株)、東ソー(株)、日本ウォーターズ(株)、日本ミリポア(株)、パーキンエルマー・ジャパン、ベックマン・コールター(株)、(株)リガク、(株)日立ハイテクノロジー、(株)三井化学分析センター、アジレント・テクノロジー(株)、メトラー・トレド(株)、(株)三ツフロンテック、(株)フジミツ、日本分光(株)、エスアイアイ・ナノテクノロジー(株)、日本電子(株)、日立化成工業(株)。

小休止を挟んで、午後2時30分から同会場において、前川尚常任幹事の司会で3件の記念講演があった。まず、升島努常任幹事を座長として、渡會 仁会長から「微視的分析化学の進展と課題」と題するご講演があった。渡會会長ご自身の液液界面の研究が、当支部の創立当初の諸先生方の考えや残された業績に影響を受けたことが紹介された。また、分析化学、とくに微視的分析化学の将来について展望を示された。今後は、Analytical Scienceとしてより広範な領域を網羅しつつ、統合的な新領域を開拓すべきであるという将来像に深い感銘を受けた。続いて、奥村 稔常任幹事を座長として、橋谷 博元支部参与から「おもしろき こともなき世を おもしろく」という題目のご講演があった。橋谷先生は、現在茨城県にお住まいで



日本分析化学会中国四国支部創立 50 周年記念会 (2008年11月14日)